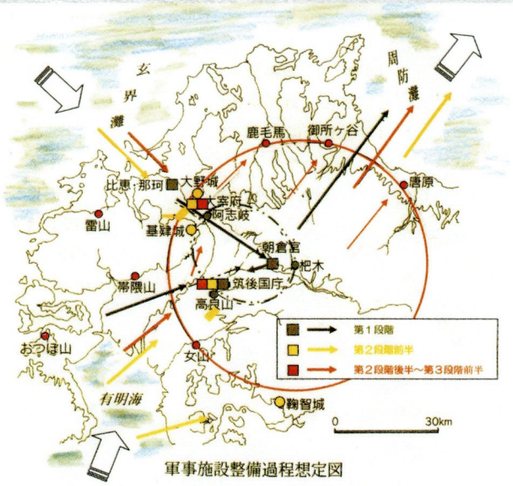
〔第２段階〕前半は白村江敗戦に伴い朝鮮式山城築造により防衛を火急に強化する段階。朝鮮式山城の築城記録が途絶える天智６（667）年まで。周辺域の高安城・屋嶋城・金田城を築造し、軍備がひとまず完了。後半期に神籠石式山城の再築を開始。高句麗滅亡の天智７（668）年から遣新羅使を頻繁に派遣し対新羅関係は改善するが、天智９（670）年に「長門に一城、筑紫に二城」を築き、天武元（672）年には「筑紫国城を高く堀を深くして外敵に備える。」国防拠点「大宰府」（後期筑紫大宰/Ⅰ期政庁）防衛。

構成施設：筑後国府前身官衙＋上津土塁＋高良山城、とうれぎ・関屋土塁＋基肄城＋阿志岐城（対有明海側）、水城＋大野城（対玄界灘側）、第１段階に築造された神籠石式山城。



軍事施設整備過程想定図

〔第３段階〕統一新羅建国の天武５（676）年以降、安史の乱〔天平勝宝７（755）年〕まで。律令制の成立期にあたり恒常的な施策の一環で軍備を図る時期。

構成施設：第２段階の施設＋再整備された神籠石式山城

５．両筑平野における神籠石式山城の設置経緯

九州経営の側面と対外交渉・半島経営上の要衝という点を充足して国防の拠点となった「大宰府」であるが、それは白村江以降に突如として北部九州の筑紫に選定されたわけではなく、遅くとも古墳時代の幕開け時点には布石が打たれていた。そして神籠石式山城の築造と配置の意味も、長期にわたる中央集権化への道程の延長線上で位置づけることができる。

大陸に直結する海路を有した筑紫の地の利は、有事の際に最前線に立場を変えることになる。ただ、その折りにも中央への侵攻ルートを遮断する策を講じやすい条件を兼ね備えた地域でもあった。中央集権化が進められて以来、両筑平野が戦略上、つまり大和政権による北部九州在地勢力の抑止と、対外戦略に係る港の安定的保有という点で要衝であったことは上述したが、さらに磐井の乱後、後に大宰府から豊前・瀬戸内海を経由して中央へ向かう主要道となった米の山峠を越えた位置に王塚古墳を、また二日市狭隘部の博多側に東光寺剣塚古墳を置き要所を点的に抑えたこと、そして神籠石式山城の分布状況などもその傍証となり、大和政権の施策が如実に顕れている。さらに仮想敵国による玄界灘や有明海からの侵攻で国防軍が掃討され北部九州本土に敵軍の駐留拠点を与えた場合、両筑平野や二日市狭隘部の地理的特徴とその閉塞性は、逆に防衛戦略的な適地の条件をも満たす。米の山峠に向かう平野の奥部の阿志岐城西麓には蘆城駅家関連の遺構群が存在し、おそらくは磐井の乱後、東進する豊後道よりも、両筑平野北縁から峠を越える北進ルートの重要性が高まってきたと考えられる。周防灘沿岸地域から畿内への道の重要性は、律令成立期の瀬戸内海沿岸の山城の分布や吉備大宰・伊予惣領の設置状況から推察されるにとどまらず、あるいは弥生時代後期の高地性集落の分布まで遡る事が可能なのかも知れない。

西海道の行政的総管や国防最前線の役割を長期にわたって担った「大宰府」は、内政・外交両側面を睨んだ中央集権化政策のもとに情勢を見極めつつ位置決定に至った。神籠石式山城の執拗なまでの配置状況には、大宰府の前身官司筑紫大宰（前期）が置かれた博多側に比べ有明海に開けた両筑平野の防禦性に劣る点が顕れていると考えられるが、一方で、磐井の乱の経験則が反映されているのかもしれない。いずれにしても両筑平野の地理的・歴史的位置は、国家成立に向けて看過できない位置を占めていたのである。このように「大宰府」の設置経緯を顧みることによって、神籠石式山城の築造目的にとどまらず、地理的・地形的条件により規定されていた北部九州における両筑平野の前代以来の歴史の継続性がうまく説明できるのではないだろうか。両筑平野を巡る神籠石式山城を含めた遺跡の動態については、大宰府の役割の二面性に象徴されるように古墳時代初頭以来の畿内勢力による支配体制の確立と対外戦略の路線上にあったと理解しておきたい。

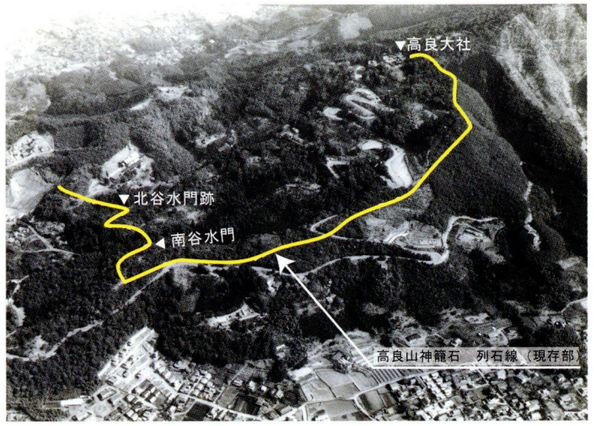
神籠石の不可思議

佐田 茂（佐賀大学名誉教授）

第４回を迎えた神籠石サミットもしだいに充実してきて、近年の古代山城研究の盛り上がりに、大きな役割をはたしている。今回の会場である久留米市は、神籠石という名称の発祥の地である。ただし、高良山の列石は、八葉石畳と呼ばれたのが、神域を守る気持が強かったのか、神籠石と呼ばれるようになった。筑後の歴史研究の始まりとされる江戸時代末期の矢野一貞の『筑後将士軍談』でも、八葉石畳を神籠石と云うと書かれており、最初から運命が決まっていたような感じである。しかも神籠石は筑紫君磐井の居たところとも述べている。

築造の年代

古代山城は、朝鮮式山城と神籠石式山城に分類されており、立地、構造など、形態の違いも指摘されているが、わかりやすいのは、文字記録に残っているのが朝鮮式山城、記録に残っていないのが神籠石式山城とする区別である。



高良山神籠石（南西より）

推古10（602）年朝廷は、征新羅将軍に来目皇子を任じ、新羅征伐を行うが、同11（603）年来目皇子は筑紫で亡くなり、代わりに當麻皇子が将軍に任じられたが、新羅を討つことはできなかった。天智２（663）年百済白村江で、わが国は唐・新羅軍に敗れ、百済は滅んだ。天智３（664）年には、対馬・壱岐・筑紫に防人と烽を置き、筑紫には水城を築いている。水城は大野城市にあり、幅60ｍの堀と堅固な土塁がつくられている。天智４（665）年には、筑紫に大野城、基肄城を築き、天智６（667）年には、倭国に高安城、讃吉（岐）に屋嶋城、対馬に金田城を築いている。高安城は天智８（669）年８月、同年冬、天智９（670）年２月にも修理関係の記事が見える。天智９（670）年には、長門に城１、筑紫に城２を築いている。持統３（689）年直廣参石上麻呂・直廣肆石川虫名が筑紫に来て、新城を監している。この新城は天智９年築城のもの指す可能性が強いがよくわからない。

天武元（672）年には、近江の三尾城を攻めるとある。これは壬申の乱での出来事で、ほかの山城とは性格が異なっている。同年筑紫国には、元から外敵を守る城があり、その城を高く、隍を深くすることは、内賊の為になるという大友皇子側からの協力依頼を筑紫大宰栗隈王はことわっている。文武２（689）年には、大野・基肄・鞠智の３城を修理する。文武３（699）年には、三野、稲積の２城を修理したとある。以後、高安城以外の関係記事は見られない。

防衛に関しては、以後、防人の行動が集中的に見られるだけで、山城の活用の様子は、基肄城・大野城にすこし見られるのみである。両城に関係ある考えられる施設は、大野城市上大利土塁、春日市大土居土塁、天神山土塁、佐賀県基山町とうれぎ土塁、関屋土塁が知られているし、春日市春日土塁、小倉土塁、筑紫野市３～４ヵ所に土塁の存在が推定されている。これからの諸施設が合わさって羅城が形成され、百済の都、扶余と似ているという指摘もある。

記録だけでみると、朝鮮式山城が築城されたのは、天智３年、天智４年、天智６年、天智９年と、７年間に限定されている。その後、修理の記事はみられるが、役割をはたした様子はあまり見られない。天智期築城以外のものの築城の時期が抹消されているのは、外政に関るもの以外は、内政に関係を持っているために、内政の失敗を隠蔽するために消されたとする見解もある。

一方、神籠石式山城は、記録には全く現れず、築城年代は考古学的調査によって決定する以外にない。近年、各地で発掘調査が相次ぎ、すこしづつではあるが、須恵器の出土がみられる